



わかば

2018. 5. 26
第18-07号
文責 校長 信國 寿敏

ホームページ <http://www.shokookai.org/gakkou.htm> 毎週火曜日更新

重点目標 一人一人が輝く教育 ～期待登校・満足下校～

小学校教育と中学校教育の違いは・・・「受験」

5月12日、19日とありました参観懇談会へのご出席、誠にありがとうございました。色々なご意見等をいただき、これからの本校の教育活動の糧としてまいります。

さて、今回は、私見や一般論ですが、小学校と中学校の教育の在り方の違いを考えてみました。日本国内の公立の小学校と中学校の教育の大きな違いの要因は、「受験」、「進路指導」があるか、ないかではないか思います。

ご存じのとおり、小・中学校は義務教育です。小学校は、中学校で困らないようにと、学力の育成に励みますが、中学校受験を強く意識したものとは違います。

一方、中学校は、入学した時から、教師たちは「15才の春、生徒たちを泣かせるな！」の合言葉の気概を持って高校受験、進路指導を意識した教育を展開していきます。

そのことは、どのような教育になるかと言えば、小学校は、色々な学習活動を仕組む教育の傾向です。中学校は、「合格を勝ち取る」と、受験突破を意識した教科書、ワークシート中心として、高校受験に向けた学力を高める教育の傾向となるようです。

本校の児童生徒もいつの日か、高校受験の時期を迎えます。「受験」は、子供たちの人生の大きな飛躍点・転換点です。子供たちが困らぬようにしっかりと学力を高めることは、大命題です。

小学部以外の教育の様子を紹介します。

小学校教員出身ですので、どうしても「わかば」の掲載内容が、小学校寄りになっていると自己反省しています。そこで、今回は、小学部以外の記事内容に特化してみました。まずは、幼稚部からです。



学習に励む中学部



ついたち♪ ふつか♪、みっか♪
よっか♪・・・と、いいますよ。



日本文化、日本語を学ぶ幼稚部

幼児教育では、季節折々の伝統行事を通して、日本の文化に触れる機会がありますが、本校は、「日本の言葉や文化への関心を育て、話す、聞く態度や言葉に対する感覚を養う」を幼稚部の目標の一つとして頑張っています。

例えば、写真のように、日本独特の数の数え方や日にちの言い方を、園児がより理解しやすいように、5月のオリジナルカレンダーを使い、リズム歌やリズムを取りながら、学習しています。当然ながら、すぐには獲得とまではいきませんが、何回となく触れさせたり、遊びやゲームなどをしたりしながら、定着を図っている幼稚部です。

小学校教育へ向けた幼小連携教育の一端とも言えます。

続いて、学習規律を重んじる中学部です。



礼に始まり礼に終わる学習規律の基本、中学部

実に何気ない授業風景ですが、この写真の場面の前は、「起立！今から・・・」と、号令がかかり授業が始まりました。そして生徒たちは、集中して授業に参加しています。

ノートがない、エンピツがない、教科書を出していないなど、学習する上での規律が乱れたのでは、学力どころの話ではありません。しっかりとした学習規律が土台となつてこそ、授業は成立し、学力も増していきます。

誰もが前を向き、姿勢がいいことは、生徒の学習に向かう心構えがよいあらわれです。



最後に、高等部は、どうでしょうか。



さすが、整理整頓が自主的にできる高等部

幼、小、中、高と学級訪問をすると、それぞれの学部が教室整理に努めていることがよくわかります。高等部ともなると、さすがに机上や机周りは、持参した物だけが置かれ、不要なものはありません。(右側上下、2枚の写真) 学ぶ環境づくりが、自主的に生徒自身でできています。

このような自主的な生徒たちの姿は、家庭での教育や成長と共に身につけてきたことでもあります。これまでの教師たちの指導のバトンタッチが行われ、現担任も指導を継続していることも要因かと思えます。

幼稚部では「うさぎ」や「ぞう」などのグループ別の整理を、また、2年生は、3 クラス共にバッグや弁当、水筒の置き方を共通指導しています。(下、横3枚の写真) 生活指導の実例です。

身の周りの整理整頓は、学ぶことができる学習環境づくりでは、とても大事です。



IT 機器の充実は大変

右の写真は、「確」の漢字の筆順が色分けされ、筆順がプレゼンで出てくるようにしてあり、それに合わせて子供たちが、指でなぞって学習しているところです。

週1回の本校では、いかに効率よく、且つ丁寧にしていくかは、重要なことです。パソコンやドキュメントカメラ等が、各学級にあることは理想的です。今回、ドキュメントカメラやプロジェクターを増やし、授業で活用できるようにと努めていますが、全クラスとは、まだいきません。



児童生徒の作品紹介 IV

井上ひさし 山形県出身

小説家、劇作家
1934～ 2010



今回は、中学部3年の「批評文」を紹介します。井上ひさし氏の「握手」を読み、それに対して批評を行う、国語科学習です。

校長 信國 寿敏

まず、「感想文」と「批評文」は、どう違うかと言えば、

- 「感想文」は、まさに読み手が思ったこと、感じたこと、学んだことなどを文にした自分の意見の表明です。
- ◎「批評文」は、レベルがぐっと上がり、筆者の生き方、考え方、意図的な文章の有効性などを、作品中の文や登場人物等の言動を根拠に論じ、筆者や読み手に理解してもらおうとする能動的な文です。中学校教育では、批評するためには、人物の生き方や描かれ方、時代や社会背景、語り手の思いや考え方、語句の使い方や表現のしかたなどの観点を定め、作品の特徴、価値などを考えることが大切です。これらのことを踏まえて、お読みください。

「握手」について(批評文)

ガドロー 愛子

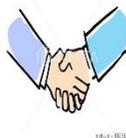
「握手」は、ルロイ修道士という天使園の元園長だったカナダ人が、故郷へ帰る為、かつての教え子を訪ね歩いている時の話だ。

このルロイ修道士には、「指言葉」という癖があった。それは「こら。」「よく聞きなさい。」「最高だ。」「わかった。」「おまえは悪い子だ。」などとさまざまな意味を持ったものだった。口で何を思っているかをそのまま単純に伝えるより、この指言葉を使って表現することがすごくうまいと思った。

ルロイ修道士に深く関わっていないと、この指言葉の意味が伝わらないので、ルロイ修道士と「わたし」の深い過去が読む人に伝わる。この井上ひさしが考えた工夫は、言葉の表現のしかたを変え、ルロイ修道士と「わたし」との関係性を小さなことで大きく描く、すばらしいものだと思った。

「握手」について(批評文)

関根 由暉



井上ひさし氏の作品、「握手」では色々な表現が使われている。その中で最も良い表現だと思ったのは題名にもなっている「握手」の部分である。ルロイ修道士と「私」が初めて会った時は、ルロイ修道士が「私」の手を強く握り、腕を勢いよく上下させた。これには孤児だった「私」をもう何も心配しなくていいと、安心させようという思いがこもっている。

しかし、別れの「握手」の場面では、逆に、大人になって成長した「私」が、悪い腫瘍の巣となっていたルロイ修道士の手を握り、恩師を励ます思いと、別れを惜しむ気持ちを込めて握手をした。こんな沢山の思いをもつ「握手」の動作の一文だけで説明している井上ひさし氏がすごいと思った。



さすがに、中学生の作品となると、コメントをするのも難しくなります。ここは素直に感じたことを書くのが一番でしょう。

二つの批評文を読むと、一方は「指言葉」の表現力に着眼し、もう一方は、題名そのものの「握手」の動作の行為の意味するところに着眼しています。共通して言えることは、表面的な動きだけでとらえずに、過去と現在の間の登場人物のつながりや出来事を読み取り、観点を定めて、作者の工夫や文章力を批評している良さがあります。



批評文(握手)

山本 稜馬

私は、この作品の時間の表現が好きだ。先生の老いの様子が力の強さなどによって表現されている部分も、もちろん好きだ。だが、私は先生と再会した時と一周忌の時間が、桜の木によって上手に表現されている所が一番好きだ。

先生と「私」が再開した頃、彼らの姿の背景には、「桜の花はもうとつくに散って、葉桜にはまだ間があつて」と書かれている。そして一周忌の頃、修道士が亡くなったのは、「葉桜が終わる頃」と書かれている。葉桜が咲いて、終わる頃までには、短くて二カ月。その死ぬまでの短い期間、きつと苦しい思いをしながら子供のために歩き回る姿から、子供達への愛情が伝わった。

「握手」について(批評文)

久保 日菜梨

井上ひさしさんが描いた作品、「握手」には、読者を引き付ける表現がいくつか使われている。その中で私が最も魅了されたのは、作者の言葉の使い方だ。

作品の中に、「わたし」が無断で天使園を抜け出し、ルロイ修道士にぶたれた事を回想する場面がある。そこで、両手の人差し指をせわしく打ちつける動きの説明がされていた。またこの動きは作品の終盤にもう一度でてくる。ルロイ修道士が重病の身で旅をしていた事を知った「わたし」がした行動だ。私は、作者の「せわしく」という言葉が「わたし」の悲しみや悔しさを読者に伝えていいると思う。

さらに、「知らぬまに」という言葉は「わたし」のルロイ修道士に対する想いの強さがあふれでる表現だと思った。作者の使う一つ一つの言葉に注目すると、登場人物の感情を感じ取れるので、いくら読んでもあきない作品だ。



小学校国語教科書と中学校国語教科書の大きな違いの一つは、挿絵です。小学校は、基本的に「起承転結」的に場面に即した大きな挿絵があり、児童が想像しやすいように構成されています。一方、中学校は、少なくなり、「握手」ではシンプルな挿絵が3つです。

つまり、読み手は、いかに文から映像を思い描けるかになり、筆者は読み手が映像を思い描けるように、執筆の努力や工夫が必要となります。二人の批評文は、時間の経過や空間をしっかりと映像化した上で、作品の特徴、価値に迫っているように思います。



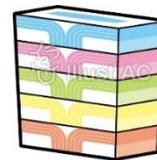
ティッシュボックスの寄附、ありがとうございます。

寄附の継続をさせていただきます。

多くの保護者の皆様のご協力を得て、5月19日時点で、20箱ご寄付をいただき、概ね、各学級に一個ずつ配ることができます。ありがとうございました。

ティッシュボックスは、消耗品ですので、また不足しだすかもしれません。そこで、しばらく寄附の期間を継続し、可能であれば、ご寄附いただければ、大変助かります。

一度に数個ではなく、1個でもご寄附いただければ、学校も子供たちも大変有難いです。ご理解とご協力をお願いいたします。



【寄附受付】○商工会事務所 ○学校の職員室前